



TITLE:

開会の辞

AUTHOR(S):

松本, 紘

---

CITATION:

松本, 紘. 開会の辞. 京都大学附置研究所・センターシンポジウム: 京都からの提言-21世紀の日本を考える (第8回) 「科学が見いだす日本の進路」 2014, 8: 1-2

ISSUE DATE:

2014-03-14

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187739>

RIGHT:

---

## 開会の辞

京都大学総長 松本 紘

---

開会の辞代読 浅野耕太教授（総長首席学事補佐）

人間・環境学研究科の浅野でございます。私、総長首席学事補佐という役割を務めておりまして、今回、総長は北海道・札幌に来ることを大変楽しみにしておりましたが、やむを得ない事情によりまして欠席ということになりました。総長から今日の挨拶の言葉をいただいてまいりましたので、この場において代読させていただきたいと存じます。

代 読

京都大学附置研究所・センターシンポジウムの開催に際し、一言ご挨拶を申し上げます。

本シンポジウムは、それぞれの分野で世界的な研究業績を挙げている京都大学の研究所センターが、それらの研究成果を社会に還元したいという思いから発足し、平成 17 年度から、「京都からの提言」と題して、東京、大阪、横浜、名古屋、福岡、京都、神戸と巡回し、このたび第 8 回目として、ここ札幌での開催の運びとなりました。

京都大学は、1897 年に創設されました。本学は、「知の伝承」並びに「知の創造」に携わる研究大学です。3000 余名の教員と 2600 余名の職員、そして 2 万 2000 人を超える大学院生と学部学生を擁しています。

本学には、10 の学部、17 の大学院に加え、14 の附置研究所及び 27 のセンター等教育研究施設があります。このうち一番新しく 2010 年 4 月設立された i P S 細胞研究所を含む 22 の附置研究所・センターが取り組んでいる基礎研究や先端的学術研究の成果の一部を広く国民の皆さまにお伝えすべく、本シンポジウムを毎年開催してまいりました。

現代の大学の使命として、学術研究に加え、教育や医療があり、さらなる社会貢献が必要とされています。

本シンポジウムでは、宇宙物理学、ヒトの未来、脳にある神経細胞とその役割、がん細胞などについて、出来る限りやさしい言葉でお伝えすることといたします。

さて、今回のテーマである「科学が見いだす日本の進路」につきましては、今回、ご講演いただく 2010 年ノーベル化学賞受賞者、北海道大学名誉教授 鈴木 章先生のご講演テーマ「科学を学ぶことの重要性」に端的に表されているものと思われます。鈴木先生の鈴木クロスカップリング理論反応と呼ばれる研究成果は、高血圧治療剤や抗がん剤などの医療品や農薬、液晶有機 EL ディスプレーの製造などで幅広く活用されており、私たちの生活を豊かにしています。

現在、先生は主に若者にサイエンスの素晴らしさを伝えるべく世界中を講演活動されていると伺っております。やさしい言葉で語られる研究の最先端を楽しく深く味わっていただきたいと思います。

今回、札幌での開催というご縁で北海道大学からのご参加とご支援をいただくことができました。

佐伯 浩総長にお越しいただくとともに、鈴木 章先生のご講演も実現いたしました。本学の学問の伝統の一つは、フィールドワークですが、北海道大学にも北の大地で育まれてきた素晴らしいフィールドワークの伝統と開拓者精神に溢れ、フロンティアに挑戦し続けている研究所・研究センターがございます。国立大学に附置されている研究所・研究センターという同じ立場から、現場に根差した発想をもとに、今後とも、さまざまな形で協力が進むようにと願っております。

最後になりましたが、本日お集まりいただいた皆さまに感謝申し上げるとともに、「自由」を重んじる教育・研究活動から生み出された「京都からの提言」に耳を傾けてくださいますようお願い申し上げます。

平成 25 年 3 月 16 日 京都大学総長 松本 紘

以上、代読です。